

nunobe fureai salon

布部ふれあいサロン

身の丈に合わせ 継続した取り組みへ



▲昭和30年ごろの富良野を振り返るビデオ上映会を見た後、食事をしながら、昔話に花を咲かせる参加者たち

高 齢者が顔を合わせ、催し物や食事などで楽しい時間を過ごす「ふれあいサロン」が、布部でも昨夏からスタートしました。

布部ふれあいサロン（坂口道郎代表）は、2カ月に1回の頻度で行われており、毎回20数人が参加。これまで、富良野オムカレーを振る舞ったり、フロアカーリングを行ったり、趣向を凝らした企画で参加者を楽しませています。1月20日に開催されたサロンでは、昭和30年頃の富良野の様子を記録したビデオ「甦る昭和の情景」を上映。参加

者らは、住民と共に作業した道路補修工事の様子や、盛大に行われていた農民運動会などの映像に、当時を思い出し、会話を弾ませていました。

住民ボランティア組織「サポートクラブ（渡辺勝信代表）」がサロン運営の母体となっており、常時8人ほどが来て、企画から当日の運営までを行っています。渡辺代表は、「喜んでもらえているみたいなので、やって良かった」と手応えを感じている様子。その一方で、担い手が充実しているとは言えず、「なるべく無理しないで、継続していきたい」と話し、サロン実施日に企画会議も行うなど、スタッフの負担を軽減する工夫をしています。

坂口代表は、「老人クラブの延長ではない。スタッフとして若い人たちにも関わってもらい世代間交流を行うことが重要。メニュー作りなど頭を悩ますこともあるが、身の丈にあった形で続けていきたい」と地域の実情を見つめながら、高齢化の課題に取り組んでいます。

